議会見物

佐藤垢石

青空文庫

上

議会中、一日くらいは傍聴席へはいってみるのも国民のつとめであろう。と考えるのだが、物臭ものにはなかなか思った通りにはゆかない。三年に一度か、五年に一度くらいしか、その機会をもたないできた。

でも、昨年の一月の議会返り初日には、二十年前の満鉄事件のとき、顧みて恥なき徒、という名文句を吐いた平沼騏一郎が、総理大臣として施政演説をやるちうことであったから、貴族院の傍聴席を覗いて見た。ところが、平沼がひどく老けているのに驚いたのである。更に悲しく思ったのは、演説が美辞麗句に満ちていて、さっぱり内容のなかったことだ。失礼であるが、そのとき、これでは長持ちはしないという印象を受けたのである。

今年は、二月の五日に、小山議長が不信任決議案をつきつけられるという新聞をみたから、これは面白いと思って行ってみる気になった。先年、小山松寿が議長になったとき、人はああいう処世術でやってきた方がいいのかな、と思ったのだ。

というのは、大正七、八年ごろ、私が毎日議会へ遊びに行っていた時分、まだ小山は初老の議員で人柄がおだやかで、憲政会総裁加藤高明の顔さえ見れば議員控室であろうと、廊下であろうと、三太夫が殿様に接するような物腰で、ペコペコと頭をさげていた。ほかの議員達は国

士めいた顔つきで、肩いからしているのが普通であるのに、この議員はなにか目ざしているのか、まことにはや、にやにやとホテルの番頭さんのようだ、と感じたのであった。

そんな人柄の小山議長が、いじめられるというのであるから、きょうはどんな風に頭をさげるであろうか、と昔のことを思い出して衆議院へ行ってみた。ところで、開会劈頭社大の浅沼が管を巻いてかかると、小山議長は昂然として浅沼に一撃を加え、騒ぐ議場を尻目にして日程変更を宣した。

人間は、偉くなってしまえばなあ、と思った。昔のペコペコの俤はない。

それからやがて、大口喜六が壇上に起った。これも、私には思い出の人だ。ひどく演説がうまくなったものだ。

明治四十五年の初夏のことであるから、もう三十年近くの昔になる。当時、私は三州豊橋に遊んでいたので一日彼を、豊川の流れの近くの家へ訪ねて行った。折りから彼は、選挙最中で犬養木堂の家来として国民党の候補に立ち、大分忙しそうであったが、私を応接間へ通し黄色い声で、なにかひどく威張ったのを記憶している。

そのとき、眼鏡をかけた細面の奥さんも応接間へ現われたと思う。きょう、ちょいと婦人傍聴席を見ると、あのときの記憶の奥さんに似た細面の眼鏡の婦人が一番前側にいた。だが、あれからもう三十年もたつのに、あのときの若さと同じ婦人だ。もし、大口の奥さんであったとしたら、女というものは随分お歳を召さぬなあ、と思った。大口が演説をはじめると、熱心に

聞き入っていた。

大口の奇声は議会の名物であったが、きょうの演説をきくと、頭のてんじょく玉から飛びだすような黄色い声でない。これは、甚だ寂しかった。やはり、老年になると声にもさびがつくのかと考えて、そのもの足らなさを隣に腰かけている人に話しかけると、隣の人は、いえあれはいまでも奇声なんですよ。だが、拡声機が上等だから、もう奇声を出す必要がないのでしょう、と答えるのだ。

ところで昔、大口が谷中（やなか）の方で開いていたという薬屋の店はどうなったろう。

中

大口喜六の質問に答えるので、米内首相が登壇した。米内光政の写真を見ると、護謨（ごむ）人形のような感じがするが、きょうの答弁には何となく弾力がない。それに、国民に対してもっと親切があるのと、もっと決然たるところがあっていいと思う。

あんなぐあいでも、国民の期待に添えるのかと思えるのであるけど、重臣共の眼から見れば、米内は内懐に何か持っているのかも知れないのだ。しかし、男振りはいい。重臣はああいう見目よい男がお好きなのかも知れないと考えた。

その次に登壇したのは、藤原銀次郎である。藤原の、からだのこなしにはどこか飄逸（ひょういつ）のと

ころがある。答弁の句切り句切りに、ひょこひょことお辞儀するのだ。そして最後に、他の所管のことはそれぞれの大臣に答弁させる、などと脱線したのは、内閣を紙会社と心得ているのかも知れない。ひどく、ご愛敬である。自分の席へ帰って行くのに足取りが、ちょこまかと、なんとなく活動役者の高勢実乗に似ている。そんな風な男から、日本の経済国策が生まれてくるのだ。

二、三年前藤原は鐘紡の津田の向こう脛をかっ払っておいて、支那の草を買ったことがある。まことに、抜け目のない商工大臣でもあろう。

貴田耘平が『産業問題』を提げて演壇へのぼって行った。あごの鬚髯（しゅぜん）は、随分白くなったが、なかなか元気だ。明治四十三年の晩秋、私が宇都宮へ遊びに行ったときには、まだ高田は県会議員をやっていて、鬚髯は黒かった。当時、高田は宇都宮の花柳街にこもつこ家というのがあって、そこの抱え妓の小玉と呼ぶ甚だ小柄な若い子を後援していたが、この元気ではいまでも若い子を贔屓（ひいき）にする実力を持っているかも知れないのである。

そんなことはどうでもいいが、高田は身のほどを知っている。百姓議員だという自覚をもって百姓議員で押し通し、農村問題一点張りでやってきて、とうとう偉くなった。へたに当世向きのことを喋りたがらぬところに、見どころがある。産業問題の質問などというのは、甚だ派手でない。しかし、聞いていると高田の言説にはなかなか滋味がある。無機肥料には価格統制をやったが、有機に価格統制をやらぬのはどういうわけであるかとか、家鶏や豚の飼料まで心

配するのは高田でなければやれないところだ。

最後に農業資材確保のことで藤原銀次郎をでかい声でおどかした。おどかされると藤原はひょこひょこと演壇へ出てきて、ぺこりとお辞儀をした。これが、きょうの第一等の余興であった。高田は、一種の風格を持っていて面白い。

高田に答えたのが、島田俊雄だ。この人間の態度と答弁が、最も要領を得ていると思った。百戦錬磨の功がある。米価は今後決して引き上げないと、きっぱりいってのけた。ほかの大臣は、何事も口の先でごにゃごにゃと国民に分からせないようにいっているけれど、島田は国民の気持ちのあるところを、しっかり掴んでいる。日本人は曖昧なことがきらいなのだ。右とか左とか、はっきりいって貰えば、それであきらめる民族だ。

下

勝正憲は、まだ官僚臭が抜けきらない。電力問題で誰かの質問に答えて、軽々に諸君が考えているような簡単な問題じゃない、などと口を滑らして、尻っ尾をつかまえられた。

勝の眼から見れば、議員どもが人民どもに見えるのは当たり前だ。傍聴席から見ても、議員どもは人民に見えるから。

それから木暮武太夫が経済問題をしゃべりだした。前橋中学で、木暮は私の後輩であった。

後輩だから、子供扱いするわけではないが、このごろ大分大人びてきた。木暮は、私という人間を知らないから、先輩だなどと思ってはいまいけれども、私は木暮を知っているから、先輩は先輩だけに、木暮の身の上を心配しているのである。

なかなか演説がうまくなった。抑揚といい論理といい演説の見本みたいなことをいう。だが、なんとしても木暮から客引風が抜けない。もっとも、木暮は伊香保温泉の宿屋の亭主であるから、自分の帳場の番頭の風がひとりでにしみ込んで、いつとはなしに、こすっからくなってしまったのだろうが、なんとしても木暮には野人の味が乏しい。

先代木暮武太夫は、自由党時代の代議士で、からだのどこかに国士の風があった。しかし、倅の武太夫にはその風は譲られてない。清濁合わせのむなどという概は、よそ国のことと考えているらしいのだ。政友会型じゃない、民政党型だ。生まれ性ならいたし方がないと考える。

だけれども、前橋中学からも一人の大臣を出したいと熱望する。そう思って前中出身者の顔触れを眼に描いてみると、やはり木暮武太夫の顔ひとりが大きく映ってくる。木暮は、将来必ず大臣になれると思う。まあ、永井柳太郎級の大臣にはなれると思う。それよりも大きな人柄の大臣になりたいと思ったら、も少し人生勉強をしてくれ。

木暮の話でひどく長くなったが、あれは私の後輩なのであるから堪忍してください。私は釣りが好きであるから、議場が釣り堀のように見えるのだ。釣り堀の底に、妙な魚がうようよ泳いでいる。町田忠治は、政権という餌を捜しているめごちみたいだ。永井柳太郎はのっぺらと

して舌平目の感じがある。桜内幸雄は、鮟鱇といったところだろう。桜内の胆が、鮟鱇の胆のようにおいしくたべられるのはいつだろう。

秋田清は、ごんずいだ。中島知久平は、墨烏賊だ。小磯国昭はべん鯛だ。小磯は果たして将来大鯛にまで育ってゆき、魚類の王さまになるかどうか。

議会の魚類はどれもこれも、物足りなさそうな顔をしている。でも、武士は食わねど高楊枝というあんばいで、支那と戦っているのは、餌が欲しくてやっているのじゃない、と頑張っているのだ。

私も、腹がへってきた。時計を見るともう六時近い。まだ、木暮がデフレーションがどうかしたとかいっている。傍聴席を出た。政党の控室を覗いて見た。ところが、どの控室にも活気がない。控室に活気のない方が、時世に誂え向きなのかも知れない。議員どもは、思う存分のことをいえない自分を憐み悲しんでいるのならば結構だが。

議院の食堂で、豚鍋で一杯やろうかと考えたが議会には酒がないときいて、外へ出た。

議院のそとは、夜の冷たい風が吹いていた。おお、寒い。

（一五・二一・六）

青空文庫情報

底本：「完本　たぬき汁」つり人ノベルズ、つり人社
　　1993（平成5）年2月10日第1刷発行
底本の親本：「随筆たぬき汁」白鴎社
　　1953（昭和28）年10月発行
※〈〉で示された編集部注は除きました。
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2007年4月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

議会見物

佐藤垢石

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/